

# 「陸軍士官学校出身

## 連隊長」の思い出

木 船 久幸 陸自68

はじめに

私は幹部候補生学校を卒業して7年間、いわゆる連隊付幹部として小倉第40普通科連隊で勤務（と言うより育てていただいた）した。その間、4人の陸軍士官学校出身の連隊長より薫陶を賜った。陸士と言えば画

一的教育を受けたみんな同じような型に嵌った人達と考えていたが、これがどうして皆さまざま個性的で私のその後の人生に多大の影響を与えてくださった。

その中のお一人、G連隊長との思い出を以下に述べる。

### その1 「木船少尉前へ」

「木船少尉前へ！」（この人はまともにも他人の階級を呼ばない。「予備学生」「見習士官」やっと少尉等、いろいろ呼ばれた）

時は70年安保を目前にした正月の寒稽古。道場一杯にヤァーヤァーやっていた連隊の幹部の方々がさつと壁

ぎわによけて中央に広場ができ、竹刀を杖にオイデ、オイデをしている

連隊長殿。（やつぱり来たか？）しかたなく出て行った。こちらの武器は官品の長木。防具はこれまた中隊に転がっていた官品のオンボロ。相手はピカピカの黒胴、ハカマまで黒。

当時は暴徒鎮圧訓練に明け暮れていて銃剣道大会と言つても短木、竹刀、二刀使い、槍など好みの武器による異種格闘が盛んであった。さすがに鎖鎌や物干し竿は見なかった。

この二人を見たとき、全幹部は次に何が起こるのか確信したのである。私自身も確信した。

幹部候補生学校で初めて銃剣道なるものを教わり、ようやく最後の最後に初段をおなさけていただいた。相手は、軍刀一本で戦場を駆け巡った元陸軍大尉、大隊長。だが私の方が若い、それに長木。おもいきりダツ

シュして突き出した。相手は微動だにせず、私の剣先をチョンとはらつて、つんのめつた私を横面一撃。目から火が出た。次いで戦闘意欲を失った私をメッタ打ち、しかも防具のない所、うすい所。「まいった」と言つても容赦なし。たまらず木銃を投げつけ組みついた。途端、私の身体は

宙を舞って見物の人達の中へ。

防大で剣道をやってきた先輩は概ね対等に打ち合っておられたが、一本のダメージがまったく違っていた。「それで人が斬れるか！」と。とにかく叩き斬る剣法でした。

「長木は百姓の竹槍。突くだけ。初一発をはずされたらそれでおしまい」と二言いただいた。

### その2 「焼き芋は皮ごと食べる！」

連隊長から呼び出しがあった。焼き芋を買つてこいとのこと。風貌からは想像のつかない下戸であり、宴会のときも饅頭を食べておられた。お腹がすいたので芋が食べたいとのこと。私も下戸なのですぐに反応。二人で2本ずつ食べることにした。「芋の皮はむくな」「皮ごと食べれば胸焼けしないぞ」…この方はうんちくというか、一家言の多い人であった。

それにしても夜も更けた現地戦術の旅館の一室で、1佐と3尉が芋を食べる姿。ああ、おぞましい。その3 「寝ないですむのか。食べないですむのか」

「木船！ お前は、特技課程は幹部レンジャーを希望しておるようだが、なぜだ」「はい！ レンジャーは男の

中の男。歩兵の花です」「フン、ずいぶんときたネエー花だな。泥水すすり草をかみ…か。鼻水たらして泣き叫ぶ。じゃあ聞か、三日三晩寝ない訓練をしたら寝ないですむのか？ 食べない訓練をしたらあとずーっといのだ？」

「連隊のレンジャー養成訓練を見たか？ あれはほとんどいじめだ。訓練において不撓不屈の精神を養うのはよしとしても、特技課程だから必要な技を習得させるべきだ。生存のための技、生地を踏破する技、爆薬等の取扱、襲撃要領等々。こちらに重点をおくべきだ。そう思わんか！」「はい」（例によってみごとなうんちくである）「であるから、お前は幹部射撃課程に入校せよ。しっかりと射撃術を習得してこい」

なんのことはない。レンジャーも追撃砲も通信も作業（施設）も、全部埋まつていて射撃しかなかったのだ。しかし、その年度の連隊レンジャー養成訓練は技量重視、飯をたらふく喰つて学生ルンルン。先輩教官はブリブリ…でした。

その4 「通信の発達は軍隊をダメにする」

尖兵行動の訓練を視察され、ほそつと「通信の発達は軍隊をダメにする」と言われた。

いつもの連隊長らしからぬお言葉である。行軍の訓練をやっていると、「何しとる。車両化、機械化された敵と時速4キが勝負になるか!」「しかし、連隊にも中隊にも人員を輸送する車はありません」「そこいら中にトラックが走っている。あれを取ってこい」という訳で重い荷物を担いでの徒歩行進から解放され、車両化中隊の尖兵行動などをやらされた。しかし、時速4キではゆっくり状況判断し決心処置ができるのに、時速20キとなると、パーンと一発撃たれただけでパニック状態。命令号令が出てこない。どこから撃たれたかも分からない。さらに後続の車は詰め掛けてダンゴ状態。「はい! 全滅。お前たちの頭はやつぱり時速4キだ!」だが、何度もやるうち、早期に敵を発見、決心処置、隊員の迅速な乗下車。車両の相互連携などスムーズに行われた。何より良かったのは歩かなくてすんだこと……。

そんな連隊長が何で? 新しいことに飛びつく人なのに。

答えは次のとおり。

無線通信機のなかった頃は、路上斥候が敵と遭遇すると、分隊長の所へ小隊長が、そして中隊長が押っ取り刀で駆け付ける。状況によっては、大隊長が馬をとばしてやってくる。そこで指揮官が情報を共有し、「大砲を一発ぶちこむか!」なんてことになる。それが逐次通信機が末端までやってくると、上の者は第一線まで出てこず、「まだか、まだか! 早く前進しろ」と言うだけ。ゆっくりタバコを吸う暇もない……ということ。

幹部候補生学校を卒業して赴任するとき、助教から「小倉の連隊長はすごい人だから、あんたも苦労するよ。我慢して頑張るんだよ」と言われたが、どうして楽しい日々でした。